

# 株主のみなさまへ

平成17年度 **事業報告書**

平成17年4月1日～平成18年3月31日



株主の皆様へ当社への御理解を一層深めていただくために、当社ホームページの「株主・投資家の皆様へ」欄では、決算説明会や中期経営計画説明会等の模様を動画配信し、タイムリーな情報発信に努めております。本年4月28日に発表された「平成17年度決算」及び「2006事業計画」の会社説明の様様について、本年9月30日までご覧いただくことができますので是非御利用ください。

当社ホームページ

株主・投資家の皆様へ

トップページのメニュー「株主・投資家の皆様へ」からお入りください。

http://www.mhi.co.jp

動画配信画面

動画はこちらから御覧いただけます。

## 目次

■ごあいさつ	1
■事業報告	5
■  社長「2006事業計画」を語る	10
■トピックス	13
■工場見学会のお知らせ	15
■連結決算の概要	16
■単独決算の概要	18
■会社の概要	20

## ごあいさつ

株主の皆様には、平素より格別の御支援、御高配を賜り、厚くお礼申し上げます。「株主のみなさまへ」をお手もとにお届けするに当たりまして、一言ごあいさつ申し上げます。

### 営業の経過及び成果

当営業年度における我が国経済は、雇用及び所得の改善を背景として個人消費が堅調であったことに加え、引き続き好調な企業業績を受け設備投資も増加傾向にありました。また、個人消費が好調な米国及び高い経済成長率が続くアジア向けを中心に輸出も高い伸びを持続するなど、全体として景気は回復基調にありました。

このような状況の下、当社グループは、収益性をより重視し、得意分野に注力した受注活動を強力に推進いたしました。この結果、当営業年度の連結受注高は、大型火力発電プラントを多数受注した原動機部門、海外でフォークリフトの販売が好調であった中量産品部門及び得意分野の都市交通システムの大型案件等を成約した機械・鉄構部門が前年度に比べ増加したほか、航空・宇宙部門も前年度を上回り、船舶・海洋部門の減少はありましたが、全体としては、前年度を約8%上回る2兆9,420億54百万円となりました。また、連結売上高も、平成15年度以降の受注拡大を反映して、順調に伸びてきております。船舶・海洋部門は前年度に比べ、船舶引渡隻数が少ないことにより減少しましたが、原動機部門が海外向け火力発電プラントを中心に、また機械・鉄構部門が化学プラントを中心に大幅に増加し

たほか、中量産品部門及び航空・宇宙部門も増加した結果、前年度を約8%上回る2兆7,921億8百万円となりました。

利益面では、営業利益は709億12百万円、経常利益は503億65百万円となり、前年度をそれぞれ561億40百万円、378億26百万円上回りました。

主要因としては、ここ数年の受注活動の成果としての売上増加・プロダクトミックス(製品構成)の改善が挙げられます。さらに、工事量増加に対応した生産能力増強をはじめとする生産性向上の効果に加え、品質・信頼性向上活動による製品保証費用の減少、販売費及び一般管理費の削減や製造コスト低減等の採算改善活動を強力に推進したことにより、資材費上昇等の悪化要因はあったものの、前年度を上回る利益を達成いたしました。特別損益として、固定資産売却益、事業改善・再構築に係る特別対策費等を計上した結果、税金等調整前当年度純利益は523億83百万円、当年度純利益は298億16百万円となり、前年度をそれぞれ359億84百万円、257億66百



左 社長 右 西岡会長

万円上回りました。  
なお、当営業年度の単独業績は、受注高は2兆3,183億35百万円、売上高は2兆2,067億78百万円、営業利益は382億21百万円、経常利益は324億16百万円、当年度純利益は261億97百万円となりました。

当営業年度の間配当は実施を見送らせていただきましたが、利益配当金につきましては、1株当たり4円の配当を実施することとさせていただきます。

以上のように、当営業年度においては、連結受注高及び連結売上高が前年度比で増加し、利益も改善しました。これは、収益力の回復を喫緊かつ最大の課題ととらえ、あらゆるコストの低減や生産効率の追求等に取り組んだ「アクション05」の成果が出つつあるものです。

また、製品事業競争力の強化策として、原動機事業では、生産能力の更なる増強のための設備強化に着手するとともに、事業体制の一層の効率

化を図るため、原動機事業本部(本社)と事業所に分散・重複している諸機能を見直し、事業の一体運営をねらった機構改革を本年2月に実施いたしました。機械・鉄構事業では、市場競争の激化に対応するため、昨年10月に立体駐車場事業の新会社を設立し、専業会社体制による事業の一体運営を実現することで、競争力の強化を図りました。さらに、国内公共投資の縮小という環境変化への対応と一層の効率的な事業運営を図るため、橋梁事業をはじめ、鉄構建設事業本部と機械事業本部の事業体制の見直しにも着手いたしました。航空宇宙事業では、世界で初めて大型民間機(B787)に採用される複合材主翼の開発・試験及び量産用工場の建設を順調に進めております。中量産品事業では、欧州における産業用エンジンの需要増に対応するため、現地工場の買収による新たな生産拠点を設立し、工作機械においても工場拡張による生産能力の増強を実施いたしました。

一方、事業体質強化の一環として、世界の競合メーカーとの競争に打ち勝つ、強力なものづくり現場を作り上げることをねらい、全社レベルのものづくり基盤強化のための施策を推進しており、本年4月に社長直属の「ものづくり革新推進室」を設置いたしました。

続きまして当営業年度における独占禁止法違反被疑事件について御報告いたします。

当社は、国土交通省及び旧日本道路公団発注の鋼鉄製橋梁工事に関し、昨年6月と8月に東京高

等裁判所に起訴され、昨年9月には公正取引委員会から排除勧告を受けました。また、汚泥処理施設等の複数の官公需事業に関し、公正取引委員会の調査を受けております。

本件につきましては、株主の皆様にご多大な御心配をお掛けし、誠に申し訳なく、深くお詫び申し上げます。

当社は、これまでもコンプライアンス委員会を中心に法令遵守の指導・教育に取り組んでまいりましたが、この取組みを一層強化し、独占禁止法に違反する行為を根絶すべく、以下の施策を展開しております。

まず、昨年7月には「内部監査室」及び「CSR推進室」を設置し、内部監査の強化とコンプライアンス推進体制の強化を図るとともに、当社取締役会において「独占禁止法を遵守し、疑われるような行為も厳に慎むことを誓う」旨の決議を行い、併せて社員全員に独占禁止法の遵守を改めて厳命いたしました。

続いて昨年8月には、全社の官公需事業の適正化を図るため、独占禁止法違反を未然に防止する社としての対応策を審議するとともに、各部門の活動状況をモニタリング、改善及び指導する場として社外有識者3名も加えた「受注適正化委員会」を設置いたしました。本委員会では、官公需営業部門における行動指針の策定、個別案件の全てを事前にチェックする仕組みの明確化、官公需営業従事者の定期的な異動のルール化とその実施、独占禁止法教育の強化等を強力に推進しております。

以上のとおり全役員・社員一同が「企業の社会的責任」を果たすことを常に念頭に置き業務を遂行するとともに、コンプライアンス確保に向けた取組みを当社グループ全体で推進し、社会からの信頼の早期回復に傾注してまいり所存ですので、株主の皆様におかれましては、何卒御理解の程、よろしくごお願い申し上げます。

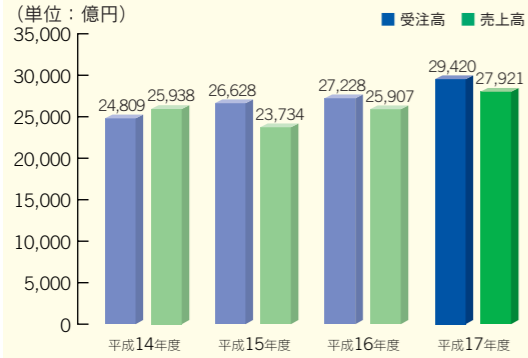
### 対処すべき課題

今後の我が国経済は、米国や中国が当面高い成長率を維持することにより、引き続き輸出が高めの伸びを持続すると予想されますが、原油をはじめとする原材料価格の上昇、人件費の増加等による企業収益の圧迫により、設備投資の鈍化が懸念されるとともに、公共投資についても全般的には減少傾向が続くと思われ、景気の先行きは必ずしも楽観できない状況にあると思われ

ます。このような状況に加え、当社グループといたしましては、基幹事業の一つである官公需事業の急減、グローバル競争の更なる激化、団塊世代の大量退職、少子化に伴う労働力の減少及び世代交代による技術・技能の伝承問題等内外で課題に直面しており、引き続きこれらの課題に対処していく必要があると考えております。

こうした中、本年4月に「確固たる収益体質の構築」、「ものづくり技術基盤の強化」、「社会・顧客の信頼性確立」を基本方針とした「2006事業計画」(中期経営計画)を策定いたしました。本計画では、「プロダクトミックスの変革」、「ものづくり

受注高・売上高(連結)





基盤の変革」,「リソース投入の変革」の3つの変革に取り組んでまいります。

まず,「プロダクトミックスの変革」では,ガスタービン,エンジン,風車等エネルギー関連製品の生産能力の増強,B787民間輸送機の量産体制の構築,ターボチャージャ(過給機),印刷機械等の中量製品の更なるグローバルな展開等により,伸長事業の強化・拡大を図る一方,成熟・低収益事業の対策を強化してまいります。また,エネルギー,航空宇宙等の各分野での新製品の開発・事業化を着実に実行するとともに,カーエアコン,電気自動車用コンポーネントなど,自動車関連製品の拡大や,次世代を担う製品の創出を行ってまいります。

次に,「ものづくり基盤の変革」では,社内生産能力の強化及び生産技術力の向上,人材の育成等による生産現場の革新を行うとともに,標準化・共通化手法の適用の拡大等,量産品のものづくり手法の全製品への展開を行ってまいります。さらに,シミュレーション技術を活用した設計段階での事前検証の強化等により,より高い製品信頼性の確立を図ります。

以上2つの変革を行うため,経営資源の更なる充実を図り,これを最適分野に重点投入する「リソース投入の変革」にも取り組んでまいります。具体的には,企業活動の原動力である人材の確保のために採用規模を拡大するとともに,伸長事業への集中的な投資,生産プロセス革新に向けた合理化投資の拡大,新製品・新事業,ものづくり技術等への研究開発の集中投資を行ってまい

ります。

これら3つの変革を行うことで,社業を通じた社会の進歩への貢献を目指すとともに,各種法令や企業倫理を守ることや,環境,人権,労働への配慮を行うことで,当社グループとして現在最も重要な責務であると位置付けているCSR(企業の社会的責任)を果たし,社会・顧客の信頼性の確立に努めてまいります。特に,独占禁止法の遵守につきましては,昨年来鋭意取り組んでおります各種委員会の活動や内部監査の強化等の諸施策を引き続き強力に推進し,万全を期してまいります。

当社グループは,依然として厳しい経営状況にありますが,以上の諸施策を着実に推進することにより,確固たる収益体質の構築と,ものづくり技術基盤の強化を図り,将来の発展を期す所存であります。また,今後も顧客や社会の視点に立って事業を進め,社会の発展に貢献するために,不断の努力を続けてまいりますので,株主の皆様には,従来にも増して御理解,御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成18年6月

取締役会長

西岡 喬

取締役社長

佃 和夫

## 事業報告

### 船舶・海洋部門

LNG船 ARCTIC PRINCESS



自動車及び一般貨物運搬船 とよふし丸

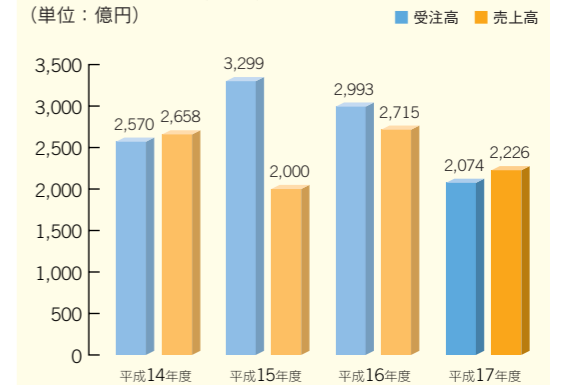


コンテナ船 HATSU SIGMA



新造船需要は引き続き高水準で推移しており,新造船契約残も十分なレベルを維持しているという状況の下,高付加価値船を中心に得意とする船種に重点を置いた受注活動を展開いたしました。この結果,自動車運搬船9隻,LNG船2隻,コンテナ船2隻,LPG船2隻,カーフェリー2隻等合計19隻(100総トン未満の船舶を除く。以下隻数について同じ。)を成約いたしました。連結受注高は,多数の成約があった前年度を下回る2,074億72百万円,年度末の新造船契約残は59隻,約380万総トンとなりました。連結売上高は,船舶引渡隻数減により,前年度を下回る2,226億51百万円となりました。営業損益は,需要低迷期の受注案件の売上が中心であったことや,鋼材等資材費高騰の影響を受けたことなどにより,106億7百万円の損失となりました。

受注高・売上高(連結)  
(単位:億円)



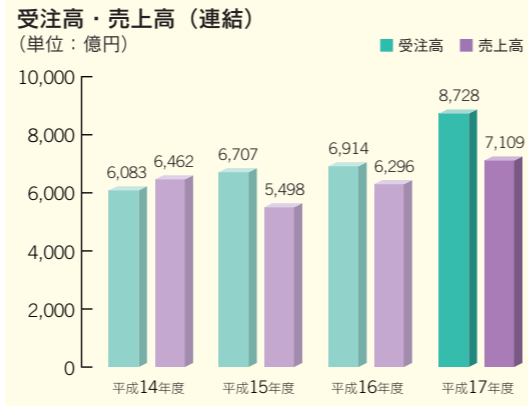
## 原動機部門

海外では、過去の納入実績が評価され、サウジアラビア向け大型発電・造水プラントを成約したのをはじめ、需要が堅調なアジアを中心に受注拡大に努めた結果、メキシコ、ベトナム、タイ、中国及びチリ向け大型火力発電プラントを受注しました。また、フランスの原子力発電所向け取替用蒸気発生器を初めて受注するなどの成果を挙げました。国内では、新規発電プラントの需要が回復傾向にある中、大型火力発電プラントを成約したほか、拡販活動が奏効した既納プラントの改良・改造・修理工事も増加しました。

以上の結果、部門全体の連結受注高は、8,728億24百万円となり前年度を上回りました。

連結売上高は、ここ数年の好調な受注結果を反映して大型火力発電プラント工事が増加したため、前年度を上回る7,109億66百万円となり、営業利益は383億42百万円となりました。

エルピスタン火力発電所（トルコ）



サンファン・メサ・ウィンドファーム（米国）



## 機械・鉄構部門

メタノールプラント（サウジアラビア）



地上式LNGタンク

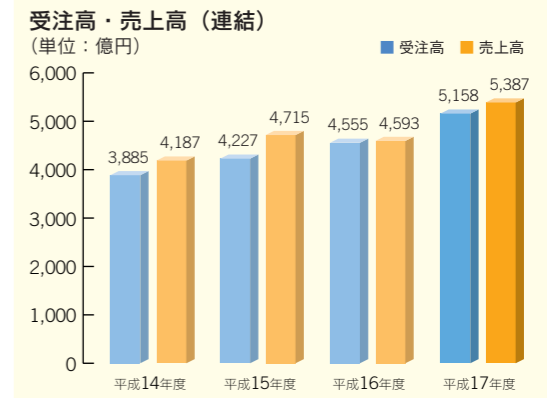


LRV グリーンムーバーmax



機械関係は、国内で廃棄物処理装置が減少しましたが、海外では、多数のプロジェクトが具体化する中、積極的な受注に努め、ドバイ向け都市交通システム、サウジアラビア向け化学プラントを成約したほか、イタリア及びスペインで排煙脱硫装置を相次いで受注し、連結受注高は前年度を大幅に上回りました。

一方、鉄構関係は、LNGの大型貯蔵タンクをイタリアで受注したほか、シンガポール向け文化・スポーツ・レジャー関連施設の大型案件を成約するなどしましたが、国内で橋梁が減少したため、連結受注高は前年度を下回りました。以上の結果、部門全体の連結受注高は前年度を上回る5,158億13百万円となりました。連結売上高は、大型化学プラントの工事の進捗や製鉄機械の売上増加等により、前年度を上回る5,387億58百万円となり、営業利益は23億32百万円となりました。



## 航空・宇宙部門

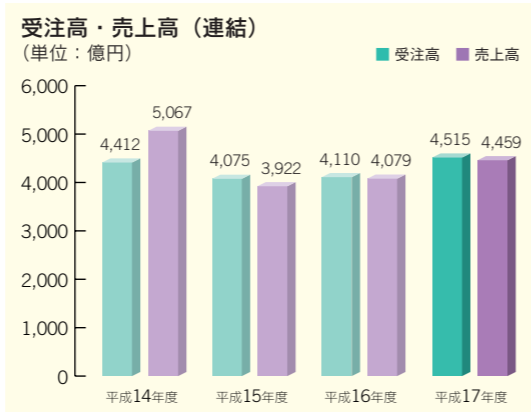
民間機関係は、航空旅客需要の回復を背景に、B787民間輸送機（主翼）及びB777民間輸送機（後部胴体等）等の受注が伸長したため、前年度を上回りました。また、防衛関係もBMD（弾道ミサイル防衛）システムの整備に伴い、新型の地对空誘導弾ペトリオット（PAC-3ミサイル）を受注したため、前年度を上回りました。この結果、部門全体の連結受注高は、国際宇宙ステーションの実験施設の開発中止による減少があったものの、4,515億29百万円となり前年度を上回りました。

連結売上高は、B777民間輸送機（後部胴体等）を中心とする民間機の引渡機数増加等により、前年度を上回る4,459億42百万円となり、営業利益は165億6百万円となりました。

H-IIAロケット（9号機）



㈱ロケットシステム提供



ボーイング777民間輸送機



SH-60K哨戒ヘリコプタ



## 中量産品部門



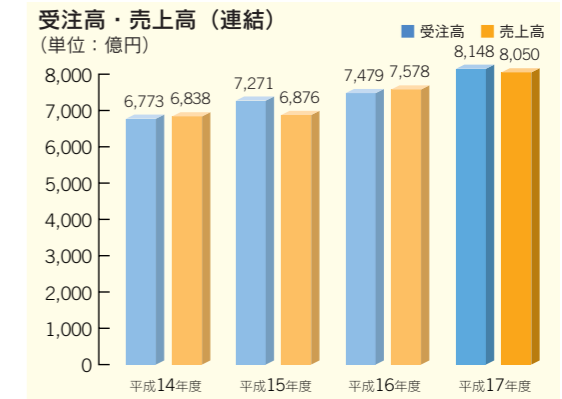
汎用機・特殊車両関係は、欧米及び東南アジアを中心に着実な受注活動に取り組んだ産業用中小型エンジンが好調であったほか、海外に重点を置き拡販に努めたフォークリフトも伸長しました。また、欧州での排気ガス規制の強化に伴う需要を取り込んだターボチャージャ（過給機）も増加したため、連結受注高は3,866億5百万円、連結売上高は3,932億3百万円となり、それぞれ前年度を上回りました。また、営業利益は120億14百万円となりました。

冷熱関係は、堅調な国内自動車販売を背景にカーエアコンが好調であったほか、新製品の投入や販売網強化等の拡販に努めたパッケージエアコンが欧州及び中国向けを中心に増加し、またターボ冷凍機も引き続き好調であったため、連結受注高は1,910億48百万円、連結売上高は1,921億29百万円となり、それぞれ前年度を上回りました。また、営業利益は2億85百万円となりました。

産業機械関係は、海外ではオフセット枚葉機やインド向け大型案件を受注した新聞用オフセット輪転機が増加しましたが、受注競争の激化や

市場規模の縮小の影響を受け、商業用オフセット輪転機及び押出成形機が減少しました。一方、国内では、新聞各社の紙面カラー化の設備投資需要を取り込んだ新聞用オフセット輪転機で大型案件を成約したほか、商業用オフセット輪転機も増加しました。また、旺盛な自動車関連産業の設備投資需要を背景に工作機械も増加しました。

以上の結果、連結受注高は2,371億62百万円、連結売上高は2,197億24百万円となり、それぞれ前年度を上回りました。また、営業利益は44億56百万円となりました。



## その他部門

連結受注高は1,302億22百万円、連結売上高は1,291億18百万円となり、それぞれ前年度を上回りました。また、営業利益は75億82百万円となりました。

# 社長「2006事業計画」を語る

## 2006事業計画（平成20年度目標）

受注・売上 3兆円

営業利益 1,200億円

経常利益 1,000億円



4月28日に発表された3カ年の中期経営計画である「2006事業計画」の内容と計画達成に向けた想いについて社長に聞きました。

**Q：**昨年から取り組んでいる2カ年の活動「アクション05」と今回新たに発表した「2006事業計画」の位置付けを聞かせてください。

**A：**まず、「アクション05」は、受注・売上は計画どおり回復してきたものの2004年度に単独経常利益が赤字となったことから、足元の収益力回復を図るための第一ステップとして緊急の損益改善活動の位置付けで、発動したものです。収益悪化の原因は、資材費高騰などの外部要因もあったものの、むしろ、生産増加に

伴う外注費の大幅増加や信頼性維持費用の増加など事業拡大に伴う費用が予想を大きく上回り、当社の「収益構造」「ものづくり力」という根本的課題が改めて表面化したことによるものです。そこで、「全方位コストダウン」や「製品信頼性向上」に向けた活動を展開するとともに、製品事業の強化にも取り組んでおります。「2006事業計画」は「アクション05」の成果を踏まえ、更に収益回復への取り組みを推進加速するための、第二ステップと位置付けて策定したものです。

**Q：**「2006事業計画」の概要について聞かせてください。

**A：**基本方針は、

- 確固たる収益体質の構築
- ものづくり技術基盤の強化
- 社会・顧客の信頼性確立

の3つです。収益力の回復が緊急課題であるとともに、メーカーとしての原点であるものづくり技術基盤を一層強化し、お客様の期待に応える製品サービスを提供し、社会の信頼に応える企業として発展し続けるという想いを基本方針としました。

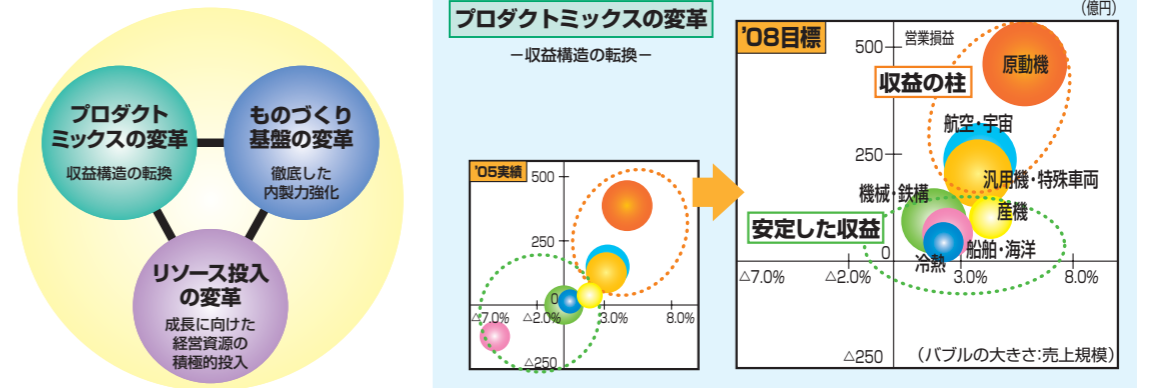
目標値達成のための重点施策としては、

- プロダクトミックスの変革
- ものづくり基盤の変革
- リソース投入の変革

の3つの変革を柱としています。

**Q：**プロダクトミックスを変革する上で、収益の柱と位置付けるセグメントの方向性についてどのように考えていますか。

**A：**収益の柱は、原動機、航空・宇宙、汎用機・特殊車両の三つのセグメントです。原動機は、石油・石炭・天然ガス・原子力から風力・太陽光などの自然エネルギーまでカバーする発電プラントのフルラインアップメーカーとしての当社の強みを活かし、世界に躍進してまいります。航空・宇宙は、B787などの新規開発プロジェクトで複合材主翼など当社の技術力を発揮し、世界的地位を確立してまいります。汎用機・特殊車両は、環境・省エネ対応技術の開発とグローバルな事業展開加速をキーワードに、エンジン・ターボチャージャー・フォークリフトを中心に事業拡大、収益力向上を図ってまいります。





**Q：ものづくり基盤の変革はどのような体制で進めるのですか。**

**A：**ものづくりは当社の基盤であり、

- ・「受注品事業」に「量産品」的  
生産システムを導入
- ・サプライチェーンマネジメントの強化
- ・ものづくり人材の育成・強化
- ・生産プロセスの変革を継続する  
体質の構築

の4点に重点的に取り組んでまいります。そのためには強力なリーダーシップが必要であり、4月に「ものづくり革新推進室」を社長直属の組織として設立し、自らが責任を持って生産現場の体質改善を加速してまいります。

**Q：リソース投入の変革についてより具体的に聞かせてください。**

**A：**「プロダクトミックスの変革」と「ものづくり基盤の変革」を推進し、確固たる収益体質を構築するために、伸長事業に経営資源を重点投入する「リソース投入の変革」に取り組んでまいります。

具体的には、人材確保のために採用を1,500人／年と大幅に増やすとともに、設備投資・研究開発投資は、伸長事業を中心に拡大し、それぞれ今後3年間で4,650億円と3,600億円を投入します。

**Q：最後に、今回の「2006事業計画」と同時に発表された、コーポレートアイデンティティ・ステートメントについて聞かせてください。**

**A：**当社は、今回『Dramatic Technologies この星に、たしかな未来を。』というコーポレートアイデンティティ・ステートメントを発表いたしました。このステートメントで表現した、ものづくり企業としての安全・安心な未来を提供していくという当社の想いを全社員で共有し、一丸となって「2006事業計画」を推進してまいります。

この星に、たしかな未来を。

**Dramatic Technologies**

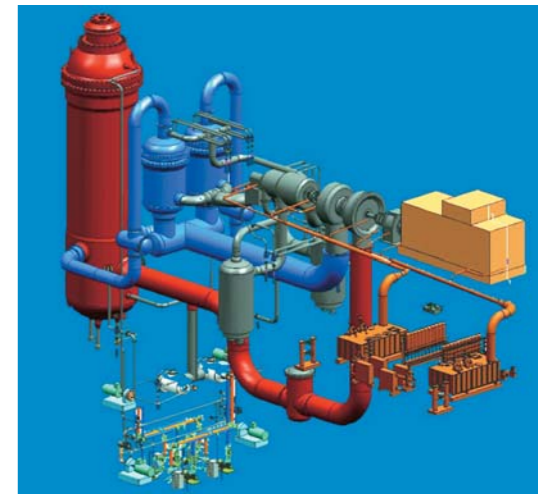
**三菱重工**

## トピックス

### 小型原子カプラント向け炉内構造物の基本設計と材料調達を受注

平成17年12月、南アフリカ共和国の原子力エンジニアリング会社であるPBMR社よりペブルベッドモジュール型高温ガス炉（PBMR：球状燃料要素炉）の主要部品である炉内構造物の基本設計と材料調達を受注しました。この高温ガス炉は、炉心熔融の心配がなく安全性の高い炉です。今回の受注は、当社の原子カプラントに関する設計能力、製作技術、さらに納入実績や現地企業との協調姿勢などが高く評価されたものです。これを契機に、さらにPBMR社との協力関係を強め、今後の南アフリカでのプロジェクトはもちろん、PBMR関連の海外案件についても積極的に取り組んでいきます。

PBMR発電設備構造図



### 日本最大規模の発電能力を誇る巨大風車を開発

当社は、日本最大規模の風車「MWT92/2.4」を開発し、平成18年1月、横浜製作所金沢工場にて実証試験をスタートしました。この風車は、翼の直径が92m、高さは70m、地面から翼の先端までの高さは116m、発電出力は2,400kWで、低風速域（風速毎秒8.5m付近）での高効率な発電を実現する一方で、風速毎秒70mという猛烈な台風にも耐える設計となっています。また、地球温暖化防止を担う再生可能エネルギーの主役として世界的な発電需要に応えるため、洋上風力発電も視野に入れ、さらに大型で高性能かつ経済的な風車の開発に取り組んでいきます。

MWT92/2.4

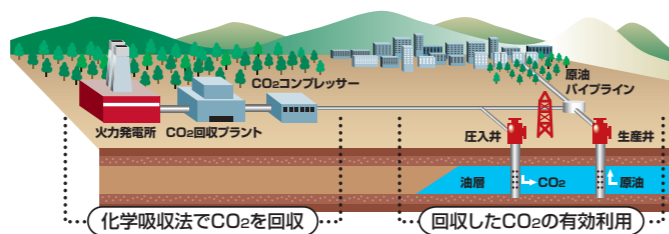




## シェルとCO<sub>2</sub>事業化で戦略的提携

当社は平成17年12月、国際石油資本ロイヤルダッチシェルグループと、排ガスから回収したCO<sub>2</sub>を油層に圧入し、残留原油の効果的回収（EOR）を行うプロジェクトを、中東地域で共同で推進する提携契約を結びました。

当社のCO<sub>2</sub>技術は、関西電力㈱と共同開発したものです。本プロジェクトには、独自開発した吸収液を用いて、発電所や工場の燃焼排ガス中のCO<sub>2</sub>を、効率的に回収する装置を使用します。回収したCO<sub>2</sub>を油層に圧入することにより、原油回収率を飛躍的に高めることができます。石油資源確保のため今後産油国の採用が期待される中、さらに技術に磨



きをかけてCO<sub>2</sub>回収事業を一層拡大していきます。また、注入に使用したCO<sub>2</sub>が地下油層に留め置かれるため、地球温暖化防止にも役立つと期待されています。

※EOR=Enhanced Oil Recovery

## 微結晶タンデム型太陽電池の量産工場を建設

当社は、微結晶タンデム型太陽電池を開発し、平成18年2月、長崎県諫早市において、量産に向けた新工場建設に着工しました。新工場では自社製主要設備（プラズマCVD装置）により、年間4万kw（電池パネル27万枚相当）の生産が可能となります。地球温暖化防止の切り札として太陽電池の旺盛な需要に応えるため、生産体制を強化して、平成20年度には150億円規模の売上を目指しています。

微結晶タンデム型太陽電池



量産工場完成予想図



## 工場見学会のお知らせ

第3回工場見学会は、去る3月24日当社神戸造船所にて、天候にも恵まれ無事に開催することができました。御好評につき、第4回工場見学会を下記のとおり開催いたしますので、多くの皆様の御応募をお待ちしております。

### 見学会概要

- ・ **見学場所** 長崎造船所（長崎県）  
今からおよそ150年前に工場の礎が築かれた、当社で最も歴史の長い事業所で、大型船舶、火力発電プラント用蒸気タービン・ボイラ、風車、太陽光発電装置等を製作しております。
- ・ **実施日時** 平成18年9月15日（金）13:00～17:00
- ・ **対象者** 当社株主の方（同伴者1名様まで可）
- ・ **集合、解散** J R長崎駅
- ・ **参加費** 無料（ただし、集合・解散場所までの往復交通費は各自の御負担とさせていただきます。）



長崎造船所

### 応募要領

- ・ **応募方法** 右記のとおり官製はがきに必要な事項を御記入の上、御応募ください。
- ・ **締切日** 平成18年7月14日（金）（当日消印有効）
- ・ **募集人数** 80名様（同伴者を含む）

※お申し込み多数の場合は、抽選とさせていただきます。

**厳正な抽選の上、当選発表につきましては当選者への御連絡（8月中旬発送予定）をもって代えさせていただきます。**

※御応募により当社が取得する個人情報は、本工場見学会を実施する上で必要な限りにおいてのみ使用いたします。※御見学時は、バスの乗り降りや階段の昇り降りがあり、1時間程工場内をお歩きいただくこともございますので御了承ください。

なお、御高齢の方及び小学生以下の方の御参加の際には、同伴者をお願いする場合があります。

### お問い合わせ先

三菱重工業株式会社 総務部 文書・管財課

電話番号：03-6716-3111（大代表）

8:45～17:30（土・日、祝祭日、当社休日を除く）

官製はがき		東京都区港区港南	
50円 切手	1088215	一丁目16番5号	
三菱重工業(株)			
総務部 文書・管財課			
工場見学会係			

宛名面

- 郵便番号
- 住所
- 電話番号
- 氏名  
(ふりがなを御記入ください。)
- 性別
- 年齢
- 同伴者の氏名、性別、年齢  
(お一人で御参加の場合は不要です。)

裏面

# 連結決算の概要

## 連結貸借対照表の要旨

(単位：億円)

資産の部	平成17年度末	平成16年度末	負債、少数株主持分 及び資本の部	平成17年度末	平成16年度末
	(平成18年3月31日現在)	(平成17年3月31日現在)		(平成18年3月31日現在)	(平成17年3月31日現在)
<b>流動資産</b>	<b>25,434</b>	<b>24,656</b>	<b>流動負債</b>	<b>16,266</b>	<b>15,679</b>
現金預金	1,951	2,119	買入債務	6,696	6,491
売上債権	10,974	10,488	短期借入金	4,093	3,566
有価証券	15	25	前受金	3,348	3,634
たな卸資産	9,715	9,585	その他流動負債	2,127	1,987
その他流動資産	2,778	2,437	<b>固定負債</b>	<b>10,263</b>	<b>9,379</b>
<b>固定資産</b>	<b>15,036</b>	<b>13,654</b>	長期借入金	5,756	5,694
有形固定資産	7,652	7,365	その他固定負債	4,507	3,685
無形固定資産	357	337	<b>負債合計</b>	<b>26,530</b>	<b>25,059</b>
投資その他の資産	7,026	5,952	少数株主持分	177	152
投資有価証券	6,281	5,387	資本金	2,656	2,656
その他	745	564	資本剰余金	2,038	2,038
			利益剰余金	7,184	7,412
			その他有価証券評価差額金	1,933	1,104
			為替換算調整勘定	1	△60
			自己株式	△51	△51
			<b>資本合計</b>	<b>13,762</b>	<b>13,099</b>
<b>資産合計</b>	<b>40,471</b>	<b>38,311</b>	<b>負債、少数株主持分及び資本合計</b>	<b>40,471</b>	<b>38,311</b>

(注) 有形固定資産の減価償却累計額 平成17年度末 15,167億円 平成16年度末 14,824億円

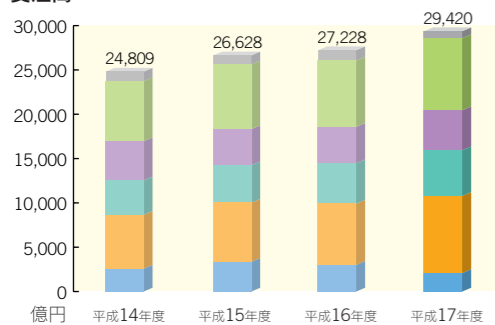
### 資産合計

平成17年度の資産合計が前年度に比べて増加したのは、主として売上高の増加により売上債権が増加したことに加え、投資有価証券の評価額が増加したことによるものです。

### 資本合計

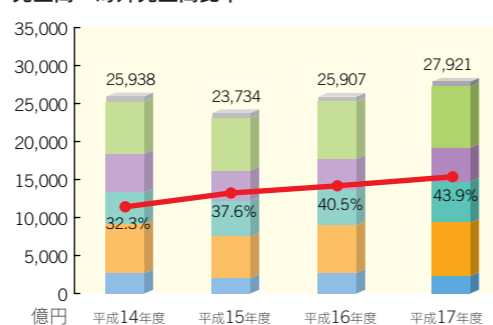
平成17年度の資本合計が前年度に比べて増加したのは、主として投資有価証券に係る評価差額金の増加によるものです。

### 受注高



■ 船舶・海洋 ■ 原動機 ■ 機械・鉄構 ■ 航空・宇宙 ■ 中量産品 ■ その他

### 売上高・海外売上高比率



## 連結損益計算書の要旨

(単位：億円)

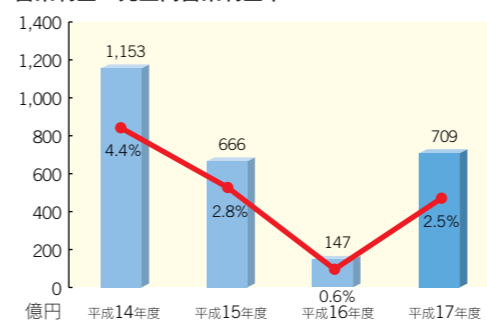
	平成17年度	平成16年度
	(平成17年4月1日から平成18年3月31日まで)	(平成16年4月1日から平成17年3月31日まで)
売上高	27,921	25,907
営業費用	27,211	25,759
営業利益	709	147
営業外収益	210	257
営業外費用	415	280
経常利益	503	125
特別利益	136	261
特別損失	116	222
税金等調整前当年度純利益	523	163
法人税等	211	114
少数株主利益	13	8
当年度純利益	298	40

(注) 1株当たり当年度純利益 平成17年度 8円85銭 平成16年度 1円20銭

### 営業利益・経常利益・当年度純利益

平成17年度の営業利益・経常利益・当年度純利益が前年度に比べて増加したのは、売上増加に伴う利益の拡大、コスト低減をはじめとする採算改善の推進等によるものです。

### 営業利益・売上高営業利益率



## 連結キャッシュ・フロー計算書の要旨

(単位：億円)

	平成17年度	平成16年度
	(平成17年4月1日から平成18年3月31日まで)	(平成16年4月1日から平成17年3月31日まで)
営業活動によるキャッシュ・フロー	739	1,070
投資活動によるキャッシュ・フロー	△1,040	△1,633
財務活動によるキャッシュ・フロー	79	579
現金及び現金同等物に係る換算差額	57	27
現金及び現金同等物の増減額	△163	44
現金及び現金同等物の期首残高	1,897	1,847
新規連結に伴う現金及び現金同等物の増加額	28	5
現金及び現金同等物の期末残高	1,762	1,897

### 営業活動によるキャッシュ・フロー

営業活動によるキャッシュ・フローは、売上債権、棚卸資産の規模が大きくなったこと等により運転資金が増加し、前年度比331億円減少の739億円となりました。

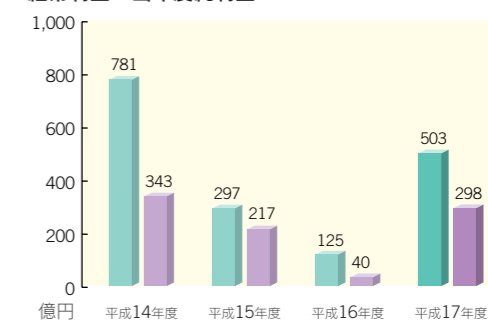
### 投資活動によるキャッシュ・フロー

投資活動によるキャッシュ・フローは、前年度は投資有価証券に含まれる三菱自動車工業(株)の増資の引き受けを実施していたことから、前年度比592億円支出が減少し△1,040億円となりました。

### 財務活動によるキャッシュ・フロー

財務活動によるキャッシュ・フローは、前年度に比べ長期借入れによる収入が少なかったこと等により、前年度比499億円減少の79億円となりました。

### 経常利益・当年度純利益



■ 経常利益 ■ 当年度純利益

# 単独決算の概要

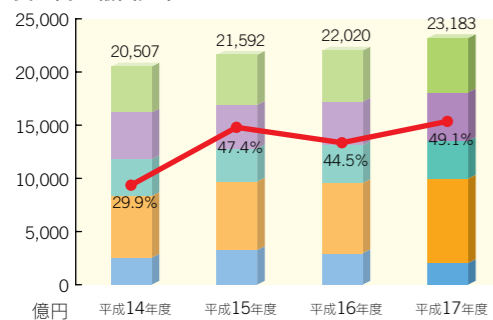
## 貸借対照表の要旨

(単位：億円)

資産の部	平成17年度末	平成16年度末	負債及び資本の部	平成17年度末	平成16年度末
	(平成18年3月31日現在)	(平成17年3月31日現在)		(平成18年3月31日現在)	(平成17年3月31日現在)
<b>流動資産</b>	<b>21,406</b>	<b>21,187</b>	<b>流動負債</b>	<b>13,285</b>	<b>13,068</b>
現金預金	982	1,429	買入債務	5,836	5,939
売上債権	9,550	9,267	短期借入金	2,837	2,253
たな卸資産	8,192	8,220	前受金	3,130	3,457
繰延税金資産	582	506	その他流動負債	1,481	1,417
その他流動資産	2,098	1,764	<b>固定負債</b>	<b>9,520</b>	<b>8,343</b>
<b>固定資産</b>	<b>14,471</b>	<b>11,700</b>	社債	2,100	2,100
<b>有形固定資産</b>	<b>5,866</b>	<b>5,697</b>	長期借入金	5,153	5,254
建物	2,092	2,045	繰延税金負債	1,502	273
その他有形固定資産	3,773	3,652	その他固定負債	764	715
<b>無形固定資産</b>	<b>200</b>	<b>195</b>	<b>負債合計</b>	<b>22,806</b>	<b>21,412</b>
<b>投資その他の資産</b>	<b>8,404</b>	<b>5,807</b>	<b>資本金</b>	<b>2,656</b>	<b>2,656</b>
投資有価証券	7,654	5,122	<b>資本剰余金</b>	<b>2,035</b>	<b>2,035</b>
その他投資等	749	685	<b>利益剰余金</b>	<b>5,885</b>	<b>5,757</b>
			その他有価証券評価差額金	2,545	1,078
			自己株式	△51	△51
<b>資産合計</b>	<b>35,877</b>	<b>32,888</b>	<b>資本合計</b>	<b>13,070</b>	<b>11,475</b>
			<b>負債及び資本合計</b>	<b>35,877</b>	<b>32,888</b>

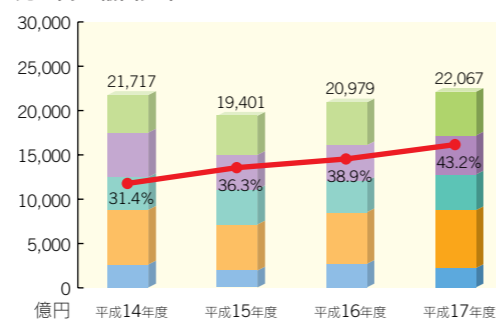
(注) 1.有形固定資産の減価償却累計額 (平成17年度末) 12,853億円 (平成16年度末) 12,730億円  
 2.商法施行規則第124条第3号に規定する純資産額 2,545億円 1,078億円

受注高・輸出比率



■ 船舶・海洋 ■ 原動機 ■ 機械・鉄構 ■ 航空・宇宙 ■ 中量産品

売上高・輸出比率



## 損益計算書の要旨

(単位：億円)

	平成17年度 (平成17年4月1日から 平成18年3月31日まで)	平成16年度 (平成16年4月1日から 平成17年3月31日まで)
売上高	22,067	20,979
営業費用	21,685	21,076
営業利益 (△は損失)	382	△97
営業外収益	284	200
営業外費用	342	199
経常利益 (△は損失)	324	△96
特別利益	138	265
特別損失	108	166
税引前当年度純利益	353	2
法人税、住民税及び事業税	△58	△28
法人税等調整額	149	51
当年度純利益 (△は損失)	261	△20
前年度繰越利益	146	373
当年度未処分利益	408	353

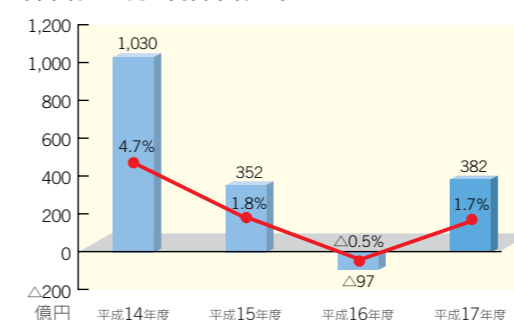
(注) 1株当たり当年度純利益 (△は損失) (平成17年度) 7円77銭 (平成16年度) △60銭

## 利益処分

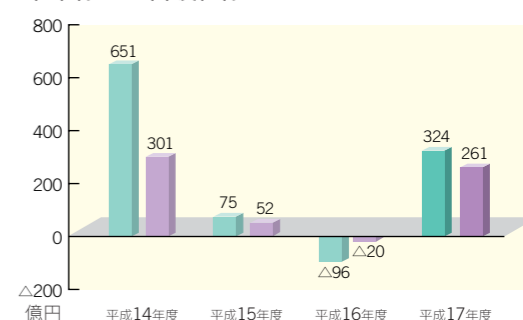
(単位：百万円)

	平成17年度 (平成18年6月28日)	平成16年度 (平成17年6月28日)
当年度未処分利益	40,809	35,329
特別償却準備金取崩額	1,612	954
固定資産圧縮積立金取崩額	593	226
海外投資等損失準備金取崩額	—	2
計	43,015	36,512
これを次のとおり処分します。		
利益配当金	13,421 (1株につき4円)	13,420 (1株につき4円)
役員賞与金 (うち監査役分)	110 (9)	— (—)
固定資産圧縮積立金	6,900	5,224
特別償却準備金	3,018	3,254
翌年度繰越利益	19,564	14,612

営業利益・売上高営業利益率



経常利益・当年度純利益



■ 経常利益 ■ 当年度純利益

# 会社の概要

## 概要

### 社名

三菱重工業株式会社

### 本社

東京都港区港南二丁目16番5号  
〒108-8215 ☎03-6716-3111

### 創立

明治17年7月7日

### 設立

昭和25年1月11日

### 資本金

265,608百万円  
(平成18年3月31日現在)

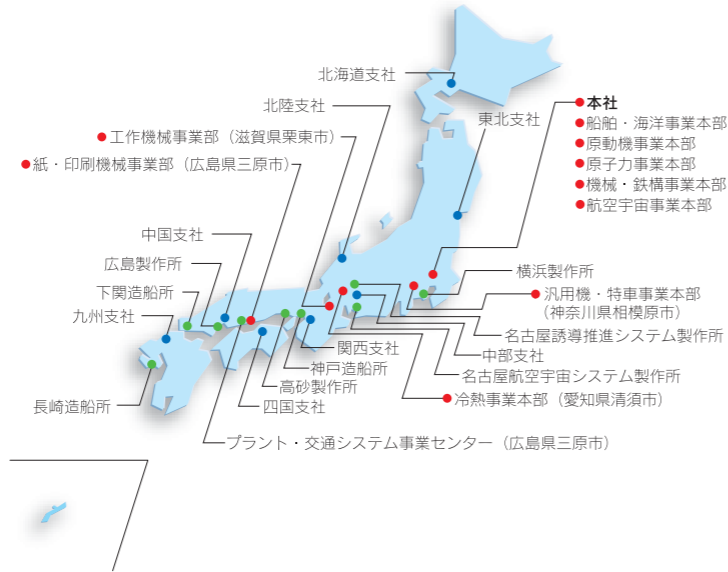
### 従業員数

32,627名  
(同上)

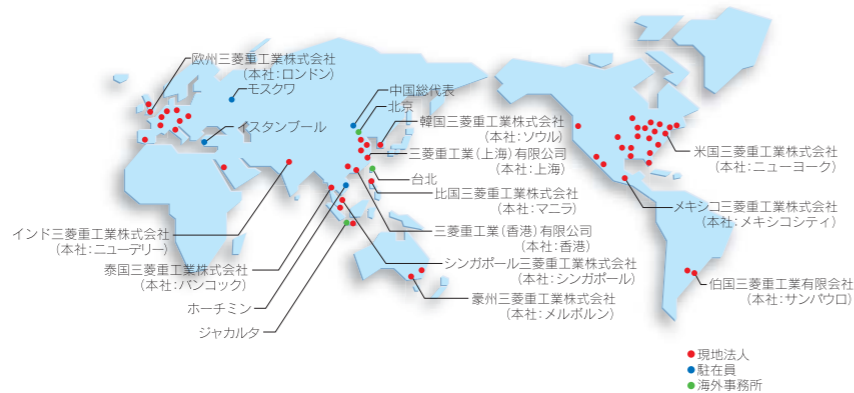
### ホームページ

<http://www.mhi.co.jp>

## 国内拠点



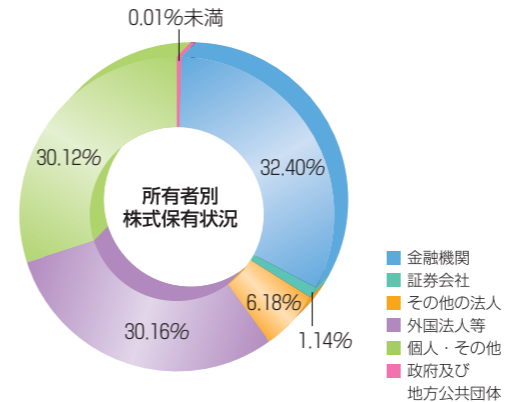
## 海外拠点



## 株式の状況

(平成18年3月31日現在)

発行可能株式総数 6,000,000,000株  
発行済株式総数 3,373,647,813株  
株主数 301,189名



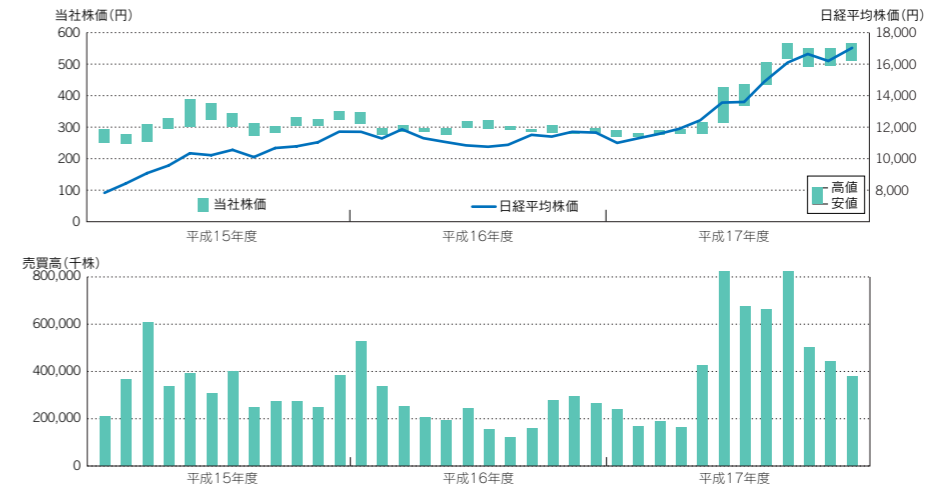
## 役員

(平成18年3月31日現在)

取締役会長	西岡 喬	監査役	岸 曉
取締役社長	佃 和夫	監査役	中野 豊士
取締役副社長執行役員	前沢 淳一	監査役	野村吉三郎
取締役常務執行役員	太田 一紀	監査役(常勤)	富田 敏徳
取締役常務執行役員	松浦 重治	監査役(常勤)	稲熊 豊彦
取締役常務執行役員	永田 育郎		
取締役常務執行役員	浦谷 良美	執行役員	富川 史雄
取締役常務執行役員	高岡 力	執行役員	内田 進
取締役常務執行役員	江川 豪雄	執行役員	松岡 利行
取締役常務執行役員	福江 一郎	執行役員	宮首 昭彦
取締役常務執行役員	戸田 信雄	執行役員	山田 陽二
取締役常務執行役員	菅 宏	執行役員	安田 勝彦
取締役常務執行役員	大宮 英明	執行役員	和木坂 史生
取締役	佐々木 幹夫	執行役員	井上 裕
取締役	和田 明広	執行役員	飯島 史郎
取締役	青木 素直	執行役員	渡部 健
取締役	吉田 雄彦	執行役員	澤 明

## 株価・売買高の推移

(東京証券取引所)



# 株主メモ

■決算期 …… 3月31日

■定時株主総会

開催期 …… 6月下旬

■基準日 …… 定時株主総会議決権行使株主確定日

3月31日

期末配当金支払株主確定日

3月31日

中間配当金支払株主確定日

9月30日

その他の基準日

上記のほか必要ある場合は、取締役会

の決議によりあらかじめ公告して設定

■公告方法 …… 電子公告

ただし、事故その他やむを得ない事由  
によって電子公告をすることができな  
い場合は日本経済新聞に掲載して行い  
ます。

電子公告掲載ウェブサイト <http://www.mhi.co.jp>

■単元株式数 …… 1,000株

■株主名簿管理人 …… 三菱UFJ信託銀行株式会社

■名義書換取扱場所 …… 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号  
三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部  
(連絡先)

東京都豊島区西池袋一丁目7番7号

電話 0120-707-696 (フリーダイヤル)

■名義書換取次所 …… 三菱UFJ信託銀行株式会社 全国各支店

## 株式についての各種手続き

名義書換、住所変更、配当金振込指定・変更、単元未満株式買取請求・買増請求\*及び相続の各種お手続きは、上記名義書換取扱場所及び名義書換取次所において取り扱っております。

なお、各種お手続きに必要な用紙については、以下の電話番号からも御請求いただけます。

専用のフリーダイヤル **0120-86-4490** (24時間・音声自動応答)

\*単元未満株式の買増請求は、9月30日及び3月31日から起算してそれぞれ12営業日前から当該日までの間は、お取扱いができませんので、御留意ください。



## 三菱みなとみらい技術館への御招待

三菱みなとみらい技術館は、明日を担う青少年たちが「科学技術」に触れ、夢を膨らませる場になることを願って開設したもので、平成17年11月に入館者が通算100万人を突破しました。

環境、宇宙、海洋、交通・輸送、エネルギー、身近な技術をテーマに、普段触れる機会の少ない最先端の科学技術を楽しみながら学んでいただけるよう、来館者参加型の展示になっております。

所在地：横浜市西区みなとみらい三丁目3番1号

三菱重工横浜ビル内

アクセス：JR線/横浜市営地下鉄「桜木町駅」より徒歩8分  
みなとみらい線「みなとみらい駅」

けやき通り口より徒歩3分

休館日：毎週月曜日（但し、月曜日が祝日の場合は翌日）

年末年始及び特定休館日（9月11日～15日）

お問い合わせ先：電話番号 **045-224-9031**

ホームページ：<http://www.mhi.co.jp/museum/>



三菱みなとみらい技術館御招待券  
有効期限：2025年9月30日  
本券を御覧いただき、  
(同伴者5名様まで有効)



R70

70%再生紙使用



大豆油インキ使用